# 生涯学習情報誌
Life Learning

11

2015
Nov.
NO.303

生涯学習開発財団

シリーズ 社会起業家

# 川初真吾氏に聴く

一般社団法人コヨーテ 代表理事

# 大人のひきこもりを何とかしたいと手を挙げたら当事者たちによるご機嫌な動きが始まった

川初氏は「ソーシャルビジネスグランプリ2012冬」のグランプリ獲得者だが、紙幅の都合で取材が先送りになり、やっとご紹介できることになった。

## ひきこもりも生き方の選択肢に

グランプリを受賞した社会起業計画は、「大人のひきこもり オルタナティブ・ライフ・プログラム」。従来「ひきこもり」は、主に青少年の問題として認識され、支援の対象も若者を前提とするものがほとんどだった。70万人以上とされる彼らのひきこもりは長期化し、40代、50代も多い。氏の弟も15年来、社会的ひきこもり状態が続き苦しんでいた。怠惰でも人間嫌いでもない。ボタンの掛け違いから誰にでも、ひきこもりは起こりうる。彼らの多くは、繊細だが、人の役に立ちたいと望んでいる。特定の分野には高いスキルを示すこともある。

起業計画は、大人のひきこもり各人に合った、アウトソーシング可能な仕事を提供すること、また、ひきこもるという選択を否定せず、生きていける道や社会のあり方を提案することだった。

グランプリから半年後の報告ステージで、「一時期何もできなくなった」と発言した氏を、正直心配した。しかし、一般社団法人コヨーテを設立、3年経って再会した氏の周りでは、心躍るイベントがたくさん開催されていた。「IORI（庵）」という、ひきこもり当事者や家族、サポーターが集い、意見交換や交流をする場は、東京都内で隔月開催されており、毎回100人を超える参加がある。「ひきこもり大学」は、ひきこもり当事者が自ら講師になり、毎月どこかで開催される講座だ。2014年11月に開催された「ひきこもりUX会議」には、全国から300人が集った。「遠吠えラジオ」は、イベント後の懇親会で交わされる会話があまりにも面白いため、多くの人にも聞かせたいと始めた、Uストリーム配信。人気を博したTV番組『ヨルタモリ』のノリだが、先に始めたのは彼らだ。

イベントには多くの当事者や家族が集う

「死にたい」と言うひきこもり当事者から電話を受け、死ぬ前に一杯やろうよと、新宿ゴールデン街に誘って話したという。写真は取材後に、ごきげんなその街で撮った1枚。実は、氏自身も発達障害の一種の症状があり、デザイン事務所に勤務しながらも、世間としっくり来ない自分を感じていた。一方、過集中の傾向は、デザインやコピーライトの仕事をする際には有利に作用したという。

■連絡先
Mail：realogue@gmail.com

## 当事者が手を挙げて運営

展開される様々なイベントは、川初氏がアイデアを出して、グイグイと関係者を引っ張っているわけではない。取材したIORIでも、冒頭のご挨拶にさえ登壇しなかった。自身の広報活動も積極的とは言い難い。不思議なことにどのイベントも、ひきこもり当事者たちが手を挙げ、サポートスタッフも現れ、ともに企画・運営をしてくれるのだそうだ。

近い将来、当事者たちとフラットな立場で、生業づくりや暮らしを支え合う仕組みを作るため、共同で「組合」を設立する話し合いも始まっている。

仕事だからと、心や体が嫌がることもやれて当然なのだろうか。川初氏や彼らは言う。「嫌なことをやって生きたくはない」「ごきげんに生きたい」。現在の社会システムのもとでは受け入れられにくいかもしれないが、どちらが人間として当たり前の感性なのか。コヨーテは、かき乱す存在でもあるという。

# 竹はシンプルなので、作り手の人間性が作品に表れる

束編花籃「一期一会」(2011年)

## 竹工芸
# 藤沼 昇
Fujinuma Noboru

1945年　栃木県大田原市生まれ
1975年　竹工芸を始める
1986年　第33回日本伝統工芸展 日本工芸会会長賞受賞
1992年　第39回日本伝統工芸展 東京都知事賞受賞
1996年　東京国立近代美術館に〈東編花藍「気」〉が所蔵される
2004年　紫綬褒章受賞
2005年　ロサンゼルス日本文化会館にて個展
2008年　シカゴ美術館にてデモンストレーションを行う
2011年　シカゴ美術館にて個展
2012年　重要無形文化財（人間国宝）に認定
2014年　伊勢神宮に〈東編花藍「白連」〉献納

日本は竹が豊富で、笹も含めて約８５０種類ある。ほぼ無尽蔵といえる素材を活かした竹工芸は、古くから各地で伝えられてきた。藤沼昇氏は、竹工芸で人間国宝に認定されているが、日本国内で作品に出会える機会はなかなかない。海外で高く評価され、作品の90％以上が海外に渡っているからだ。氏が日本文化に目覚めたのはフランス旅行中。帰国後に様々な伝統文化に触れる中で、生まれ育った栃木県大田原市で盛んだった竹工芸と出会う。30歳という遅い人生の転機から、人間国宝にまで至った藤沼氏の生き様や、作品作りへの思いに触れたいと、大田原市の工房を訪ねた。

本シリーズでは、藤沼氏とその作品の魅力を2回に分けて紹介する。今回（I）は、原動力となった日本文化への思い、竹工芸との出会い、竹工芸の魅力などについて。次回は、人間国宝という第一人者として作品作りに取り組む姿勢、海外での展開、後世への文化伝承や今後への思いを紹介する。

――カメラマンになる夢が着実に形になっていった時期に、人生の大きな転機があったそうですね。

**はい。27歳の時に参加したヨーロッパ旅行で、シャモニーのスキー場から観た景色の壮大さと美しさは、カメラなんかでは人に伝えきれないものがあることを教えてくれました。さらに、パリのシャンゼリゼ通り、凱旋門、ルーブル美術館、ナポレオン時代の遺産などを目にしました。日本とは違う永く残る石の文化に驚くと同時に、自分達の文化に揺るぎない誇りと自信を持つ、フランスの人々の姿が目に焼き付きました。**

——西洋文化の凄さに圧倒されたと。

いいえ。感動はしましたが、日本だって負けていないはずだと思いました。日本人は高度成長期に西洋に追い付くことだけに目を奪われ、自国の文化をどこかに置き忘れていました。日本文化の素晴らしさをもう一度見直せば、日本人としての誇りを取り戻せると感じたのです。パリの街頭で見た人々に大いに触発され、日本の可能性を信じ、日本人になってやろうと決心しました。

——帰国後、日本文化を学ぶようになったのですね。

はい、日本文化とは何かを徹底的に追求していきました。そんな中、目を向けたのが伝統工芸です。継承してきた日本人の心が凝縮されていると思えたからです。当時は市町村のカルチャー教室が隆盛の時代で、私も通ってみて、その講座の中に竹工芸があったのです。

——竹工芸を一生の仕事としようと決心したのは、何がきっかけでしたか。

一冊の作品集との出会いでした。竹工芸で最初の人間国宝・生野祥雲斎（しょうのしょうんさい）の遺作集です。凄かったです。ひと目見て心が動きました。高くて当時の月給1か月分でしたが、つぎ込んで入手しました。それまでは、竹は日用雑貨のイメージが強かったんです。幼い頃から、周囲に笊（ざる）や籠（かご）などが当たり前にあったからでしょう。遺作集を見て、竹と人間には、こんなに凄いことができると驚きました。竹工芸に一生を捧げると決心した瞬間です。

——本格的な技術はどのように学んだのですか。

30歳で勤めを辞め、地元の竹工芸家・八木澤啓造の下で基本の習得をしました。道具の使い方、素材の見極めと扱い方、デザイン、染色、編組技法等です。1年半で独立させられてしまい、その後は、生野先生の遺作集がまさに師匠でした。アップの写真が多く、編み方もよく見え、真似て作ることで技法を体得できました。写真は平面ですが、影の出方で立体像が想像できるなど、かつての写真の勉強が生きました。

根曲竹「春潮」(1996年)

網代編盛籃「游」(2008年)

シカゴ美術館展示風景（2011年）

——竹工芸の魅力は、どういった所にありますか。

竹は素材としてシンプルなので、作る人間の感性が作品に出るのです。私は「念」や「気」と言っていますが、作家の思いが、見る人に強い印象を残すのだと思います。技術がどんなに高くても、よい気を出せない人は、職人にはなれても作家にはなれません。竹には、見る人の気も投影されるので、好きな作品を聞けば、その人の今の精神状態などがわかりますよ。

——素材の竹は、ご自分でも山に入って採ってこられるそうですね。

はい、創作する作品のイメージに合った竹を探すことも、工芸家としては面白い作業となります。竹は稲科の植物で、木材と草類との中間です。竹の作品作りの特徴のひとつとして、節を生かすことがあります。

素材は、地元の真竹、篠竹、根曲竹など5種類ほどを使い分けています。かつて温かい地方の竹を使ってみたところ、柔らか過ぎると感じました。気質が合うのはやはり地元産だと思います。

聞き手：上野由美子（左）
古代オリエントガラス研究家。UCL（ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン）考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加（1999年～2002年）。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

# 秋の果物

秋はたくさんの果物が店頭に並びます。ブドウ・ナシ・洋ナシ・イチジク・柿・リンゴ……これらから3つを選んで、美しい彩りを壊さないように、お料理に活かしてみましょう。

●カキ（柿）

奈良時代に中国から渋柿が渡来し、鎌倉時代に甘柿が生まれた。酔い覚ましの果物として有名で、ビタミンC、カロテン、食物繊維、カリウムが豊富。柿のタンニンには強い抗酸化作用があり、心臓病や脳卒中、ガンなどの生活習慣病予防に効果があるとされる。柿の葉茶は、利尿効果が高く、高血圧に良い飲み物。

●ブドウ（葡萄）

鎌倉時代初期に甲州ブドウが発見され、明治時代には欧米から多くの品種が入る。紫色の皮の色素はアントシアニンで、抗酸化作用が強い。また、「ブドウ糖」の名が葡萄から来ているように、優れたエネルギー源となり、疲労回復に即効性がある。気力が下がっている人、血行の悪い人にお勧めしたい滋養強壮食。塩分過剰気味の現代人には必須のカリウムも豊富だ。

●イチジク（無花果）

果実の内側に咲く花が外からは見えないため「無花果」と記される。聖書に登場するほど古くから親しまれた。古代エジプトでは薬用として、中国では今も漢方に用いられている。カルシウム、各種ビタミン、ミネラルを多く含み、水溶性食物繊維のペクチンはお通じを整えるとして有名。また、タンパク質分解酵素であるフィシンを含むので、食後のデザートには最適の果物といえる。

## ◆果物三種の白和え

〈材料／4〜6人分〉

柿…… 1個
イチジク…… 1個
ブドウ（2〜3種類合わせて） … 20粒
〈白和え衣〉
木綿豆腐…… 1丁
白ゴマ…… 大4
砂糖…… 大1
塩…… 小1
薄口醤油…… 小2

〈作り方〉

①豆腐は熱湯でさっとゆでる。まな板を使い、重しを乗せて、豆腐の厚みが半分になるまで水切りをする。
②ブドウは皮をむいて縦半分に切り、種を取り出す。柿は皮をむき、くし形に切る。イチジクは皮つきのままで、崩さぬように、くし形に切る。
③煎りゴマをすり鉢ですり、①の豆腐を加えて、すりつぶす。その中に、砂糖、塩を加えて、さらに混ぜ合わせる。滑らかになったら、薄口醤油を加えて、白和え衣を仕上げる。
④②を食べる直前に、崩れないように混ぜ合わせて、③で和える。

**提供：FLAネットワーク協会**

一般社団法人FLAネットワーク協会では、食生活アドバイザー®検定を通して、正しい食事を生活とともに提案し、適切な助言や指導ができる食生活の専門家を育成しています。また、様々な面で優れている和食の見直しと普及にも力を注いでいます。
お問合せは▶TEL 0120-86-3593